

コロナに負けない歌の本-2

も く じ (元歌)・・・<歌い出し>

新 感 染・・・(スキー)・・・<山はしろがね朝日をあびて>

熱・・・・・・・・(月)・・・・・・・・<出た出た月が>

政 界 賦・・・・・・・・(早春賦)・・・・・・・・<春は名のみ>

医療を守る人・・・・・・・・(灯台守)・・・・・・・・<凍れる月影空に冴えて>

崩 壊・・・・・・・・(花火)・・・・・・・・<ドンとなった花火だ>

教育改革の歌・・・・・・・・(埴生の宿)・・・・・・・・<埴生の宿もわが宿>

村のお医者さん・・・・・・・・(村の鍛冶や)・・・・・・・・<しばしもやまずに>

この店・・・・・・・・(この道)・・・・・・・・<この道はいつか来た道>

斎場の月・・・・・・・・(荒城の月)・・・・・・・・<春高樓の花の宴>

娑婆の思い出・・・・・・・・(夏の思い出)・・・・・・・・<夏が来れば思い出す>

新 感 染

(「スキー」で歌えます)

あなたひどいわ マスクもせずに
しゃべるスピード 風切る速さ
飛ぶはウイルス 舞い立つつばき
お お お この身にかかるよ かかる

真一文字に 我が家に帰り
さっと手洗い うがいに消毒
ぐんと迫るは 感染リスク
お お お おそろし 受けるよ 検査

熱

(「月」で歌えます)

出た出た 熱が だるいだるい まあ だるい
37度の 熱が

下がった 熱にゴッホンゴッホン 咳が出る
水のように 鼻が

また出た 熱が 高い高い まあ 高い
39度の 熱が

政 界 賦

(「早春賦」で歌えます)

菅は名のみで 風に揺らぎて 岸田・石破は 動き思えど
時にあらじと 声も立てず 時にあらじと 声も立てず

コロナ来たりて 足もすくんで 枝野・志位・維新 思い乱れて
今日もきのうも 何もせず 今日もきのうも 何もせず

あてにならない 話ばかりで 聞けば腹立つ 胸の思いを
いかにせよとの この頃か いかにせよとの この頃か

医療を守る人

(「灯台守」で歌えます)

凍れる真夜中 赤い光
真冬の夜中に ひびくサイレン
思えよ病院 守る人の愛の心

はげしき雨風 荒れる日でも
山なす患者に 向かう白衣
その夜も病院 守る人
尊き誠よ 町を照らす

崩壊

(「花火」で歌えます)

どんと増えたコロナだ 恐ろしや
国いっぱい広がった 感染患者が広がった

どんと増えた何百 重症者
ベッドが足りない 大変だ 医療崩壊 すぐそこに

教育改革の歌

(「殖生の宿」で歌えます)

菽生田のやつ いやな奴
我が身の丈も 知らぬくせ
役に立たない 英語子らに
日本語さえも わからぬのに
おお 我が子らよ 気の毒なりや 気の毒な

文字の読み書き 力なく
友と仲良く できもせず
入試のしくみ また変えて
あわれなりや 人作り
おお 我が国よ お先真っ暗 暗闇だ

村のお医者さん

(「村の鍛冶や」で歌えます)

しばしも休まず 白衣で動く
飛び来る患者に 走るドクター
食事の時さえ 息をもつがず
仕事に精出す 村のお医者

寝る間も惜しんで 診察続き
お医者の仕事は 日々に繁盛
あたりに類なき きびしい仕事
我が身の感染 心配しつつ

この店

(「この道」で歌えます)

この店は いつか来た店
ああ そうだよ お菓子屋の 人と来た店

あの人は どこかおかしい
ああ そうだよ 咳をしてたし くしゃみもしてた

この私 何かおかしい
ああ そうだよ あの店で 感染したの

斎場の月

(「荒城の月」で歌えます)

春 高校の同窓会 めぐる盃 影さして
あくる朝には 熱が出て 昔の元気 今いずこ

秋 陣営の旗あげに 飛び交うつばき 数見せて
外すマスクに せまるもの 昔は元気 今病気

今 斎場の 夜半の月 帰らぬ人は 今日もまた
送る者なく ただ一人 昔の友よ 今いずこ

娑婆の思い出

(「夏の思い出」で歌えます)

夏が来れば 思い出す はるかな娑婆 遠い空
夢の中に 浮かび来る やさしい人 子ら友や
水商売の店 混んでた
飲んでる内に 意識不明に
シャクにさわるけど懐かしい はるかな娑婆 遠い空

夏が来れば 思い出す はるかな娑婆 遠い国
花の中に そよそよと ゆれゆれる うす煙
水商売の店 行かなきゃ
こんなことには ならずすんだ
まなこ閉じれば 悔い残る はるかな娑婆 遠い国